



その2

## 井上桐亭・金橋

—いのうえとうてい

きんきょう—

(平成20年5月1日号—第254号)



船橋の二ノ宮神社は、慶長8年(1603)に豊臣秀頼[とよとみひでより]が大坂城鬼門[きもん]除けのため、片桐且元[かたぎりかつもと]を奉行として本殿等を修理させた由緒ある神社です。また当社の神主を務めていた井上家も、最近発見された戦国時代初期の古文書に、すでにその名が見える由緒ある家です。

享保から天明期(1716～1789)に神主を務めていたのが、井上桐亭・金橋父子でした。ともに詩歌にすぐれ、のちに輩出する坂村の岡田本房[ほんぼう]・逸[いつ]、三浦蘭阪[らんぱん]らへの影響も大きく、寛政期(1789～1801)に活躍する当地文人グループの先駆であり、中心的存在となります。

桐亭は、その死後、孫たちによって詩集『桐亭遺稿』が刊行され、その作風が知られますが、金橋の遺作は散逸し、ほとんど知られていませんでした。

ところが、昭和46年に金橋のものを含む二ノ宮神社奉納歌が見つかりました。確認された奉納歌は435通、奉納者は岡田本房や三浦義方・蘭阪父子など47人以上に上りますが、金橋の奉納歌は135通あり、その数は群を抜いています。

さらに近年、三浦家に伝えられた古文書の中からも桐亭・金橋や義方・蘭阪らの和歌が数多く発見されました。それらには歌会の場所など、さまざまな情報が書き込まれています。例えば、三浦義方作の和歌には、井上家で詠み、そこに招かれた公家が添削をしたという注記があり、文人グループの具体的な活動の様子が浮かび上がってきます。



二ノ宮神社(船橋本町1丁目)